

私の京都新聞評

土居 好江

読解力や算数の基礎学力が落ち、教科書会社が中学一年の数字、国語、理科の内容に窮しているという。今、何が起きているのか。ネットを介した社会で育ち、現実の世界を読み取る感性に欠ける若者が増えているようだ。大学院生が雑巾を絞れない、料理学校で学んでも布巾を洗えないという嘘のような話もある。今の時代に必要な教育とは何か、ふと考えてしまう。

2月14日の朝刊第2社会面(30



面)で「茶道・華道を 京の小中学校、21年度までに」と報じていた。京都ならではの素晴らしい取り組みだ。京都は平安京建都から明治維新まで1074年間、この国の都であり、文化や教育の先進都市であった。

明治維新後、都ではなくなったことに危機感を募らせた京都人が最初に手掛けたのは人づくりの教育であり、地域経済を活性化させ、近代都市への変貌を遂げることだった。倉密局(理化学・工業技術

の研究・普及を目的に設けた勸業教育施設には外国人技師が雇われ、島津源蔵は外国人技師に教えを乞い、仏具の金物加工の職人だった技を活かし、西洋の技術と京都の伝統的職人技を合体させ、島津製作所を誕生させた。

市民の寵金(寵の数に応じた寄付金)を集め、番組小学校が設立されたのもそんな時期だ。月一回の夜間講座口が回覧板で知らされ、小学巡講師が一般市民にも文

教育と伝統文化 発信注目

校に関わった。大人も子供も真剣だった。知恵も絞り、身を削って教育にお金と時間を投入した立役者が大勢いた。行政的役割も兼ねていた番組小学校では、読書、算術だけでなく、「世界国尽」(福沢諭吉が記した世界各国の地理や歴史の入門書)を使つての授業など、新しい時代の到来を予感させる教育が施された。寺子屋時代の読み、書き、そろばんを基礎に、海外事情まで講ずる番組小学校を視察した福沢はその先進さを絶賛したという。

11日朝刊の地域・総合面(22面)に「認知症ケアとしていけばなが注目されている」という記事が載った。花を生けることで安心感が得られ、脳の活性化につながり、五感を刺激し攻撃性も緩和されるらしい。「植物は酸素を出し、人間は二酸化炭素を出す。呼吸の仕方が異なり循環しているので、花に声をかけて花と生け手が一体になるように指導している」と語る華道家の中村秀苑氏は、小学生が仏壇の花を見て「この百合の花、力一杯生きている」と口にしたのを

聞き、その感性に驚いた。花には感性を育む要素があると、半世紀に及ぶ教授人生から実感している。私たち「京すずめ文化観光研究所」も京の文化を継承するため、19年にわたり、さまざまな発信を続けてきた。これもまた教育の一端といえるのではないか。多くの人が教育に関われる様、その一端を京都新聞の紙面も担って欲しい。(京すずめ文化観光研究所理事長) 次回の土居さんの評は4月14日に掲載します。